



森のジードルング 「オンケルトムズヒュッテ」訪問記

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

2024年7月10日、筆者はベルリン滞在中にシュテータグリッツにあるヴィンフリード・ブレンネさんの建築設計事務所を訪れた。ブレンネさんはブルーノ・タウト研究の第一人者で、タウトが設計した住宅団地の四件がユネスコの世界文化遺産に2008年に登録される際に、申請書類を作成された方である。ご息子のファビアン・ブレンネさんも事務所の経営に携わっており、お二人はまるで旧友のように私の訪問を温かく迎えてくれた(写真1)。

タウトについてさまざまな話を交わした後、彼らはオンケルトムズヒュッテの団地も世界文化遺産に登録するための申請書類を作成中であると教えてくれた。長い会話を終え、私は事務所を後にし、地下鉄を乗り継いでオンケルトムズヒュッテへと向かった。地下鉄のオンケルトムズヒュッテ駅は1929年12月に開業している。タウトはジードルングの中には商店を作らせなかった。地下鉄の駅にそって商店を作った。駅中商店の走りである。現在もブルーノ・タウトの名を冠する商店もある(写真2、写真3)。

地下鉄のオンケルトムズヒュッテ駅を降りた瞬間、筆者の目の前に広がったのは、まるで夢の中の風景のような光景であった。松と白樺の森に囲まれた住宅団地は、色とりどりの家々が並び、まるで自然の中に溶け込むように存在している(写真4)。

住宅はそれぞれ独特の色合いで塗られており、窓枠や玄関扉まで美しく彩られ、どこか温かみのある雰囲気醸し出している。赤や青、黄色の鮮やかな色彩が、木々の緑と絶妙に調和し、心が躍るような感覚に包まれる。

森の静けさの中に響く鳥のさえずりが、これらの家々に新たな命を吹き込んでいるようであった。歩を進めるごとに、窓の向こうに見える家族の笑顔や、子どもたちの遊ぶ姿が目に見え込んできて、生活の息吹を感じた。

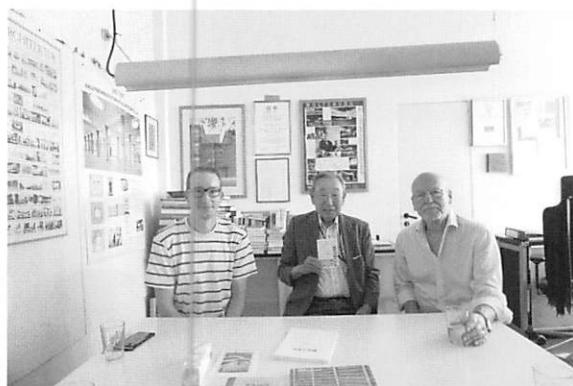


写真1 ベルリンのブレンネ建築設計事務所訪問(右がヴィンフリード・ブレンネ所長、中央筆者、左は息子のファビアン・ブレンネさん)



写真2 地下鉄オンケルトムズヒュッテ駅のホーム



写真3 地下鉄オンケルトムズヒュッテ駅、駅中商店街



写真4 白樺と松の林に囲まれたオンケルトムズヒュッテのジードルング



写真5 「このジードルングは1926～1931年の間にGEHAGにより建設された」と記された集合住宅

森のジードルング

建設が始まってわずか1年後の1926年、GEHAG(共同住宅・貯蓄・建設株式会社)は、マルティン・ワグナーと共に「オンケル・トムズ・ヒュッテ森林居住区」という壮大なプロジェクトに取り組んだ。この計画は、ヴァイマル共和国における社会住宅建設の中で、特に優れた都市計画と建築の成果の一つとされている(写真5)。

ジードルングの建設地として選ばれたのは、ツェーレンドルフの郊外に広がる美しい敷地。グリーンヴァルトの端には、明るい松や白樺の森が広がり、風光明媚な場所であった。1922年、建設業者アドルフ・ゾンマーフェルトは、この旧パーゼヴァルトの土地に「オンケル・トムズ・ヒュッテ」という観光名所とフィシュタル(Fischtal)の間に、まずは庭園都市風の小住宅地を計画した。その後、フレッド・フォルベいの都市計画に基づいて、一戸建てと集合住宅を組み合わせた形での開発を試みた。しかし、ツェーレンドルフの区役所が多層階建て建築と連棟住宅に反対し、別荘風建築を支持したため、これらの計画は実現しなかった。

その後、ゾンマーフェルト、あるいは彼の所有する会社「Allgemeine Häuserbau AG 1872」は、1926年にマルティン・ワグナーの仲介で、準備が整った土地をGEHAGに提供した。GEHAGはその土地を購入し、同年、リーマイスター通り(Riemeisterstraße)にて最初の家の建設を始めた。ワグナーの助けを借りて、強力な労働組合や政党との関係を通じて、新しい時代の大規模住宅地に対する懸念を克服し、色とりどりの平屋根の住宅が次々と建てられていったのである。

ゾンマーフェルト、彼の名はバウハウスの成立と不可

分に結びついている。ヴァイマルの地にその理念が芽生えたとき、彼はその後ろに静かに立ち、資金を注ぎ込んだ。バウハウスの側もまた、彼のために木造の校舎住宅を設計した。その構想は、かつてベルリンの街に息づいていたが、時の流れとともに第二次大戦の激流に巻き込まれ、灰燼に帰してしまった。ゾンマーフェルトの名は、単なる財政支援者としてではなく、創造の土壌を耕す存在として、その記憶に刻まれている。彼のために設計されたその住宅は、形を失ったが、その理念は今なお、私たちの思考の中に生き続けている。焼かれた木材の断片は、無常の象徴となり、未来への問いを投げかけている。時代を超えた彼の影は、私たちに何を語りかけるのか。

ブルーノ・タウトの設計によるこの場所は、単なる住宅団地ではなく、人々が共に過ごし、笑顔を交わす場所なのだ実感した。自然と人間の調和、そして美が融合したこの特別な場所に、筆者は心から魅了された。

住宅の建設が、タウトとマルティン・ヴァグナーの協力のもと、段階的に発展していった。全体で1,915戸の住宅があり、そのうち1,106戸は集合住宅、809戸は一戸建ての連続住宅である。最初の4つの段階は地下鉄の南側に位置している(図1)。

タウトが手がけた集合住宅は、ヴァルトヒュターファード(Waldhüterpfad)、イム・ゲシュテル(Im Gestell)、リーマイスター通り(Riemeisterstraße)の間にあり、東にはヴィルスキ通り(Wilkstraße)沿いの集合住宅やアウアーハーンバルツ通(Auerhahnbalz)りとアム・フィシュタル通り(am Fischtal)の一戸建て連続住宅が広がっている。このエリアでは、わずか2種類の住宅タイプと基本的なデザイン要素を用いて、1920年

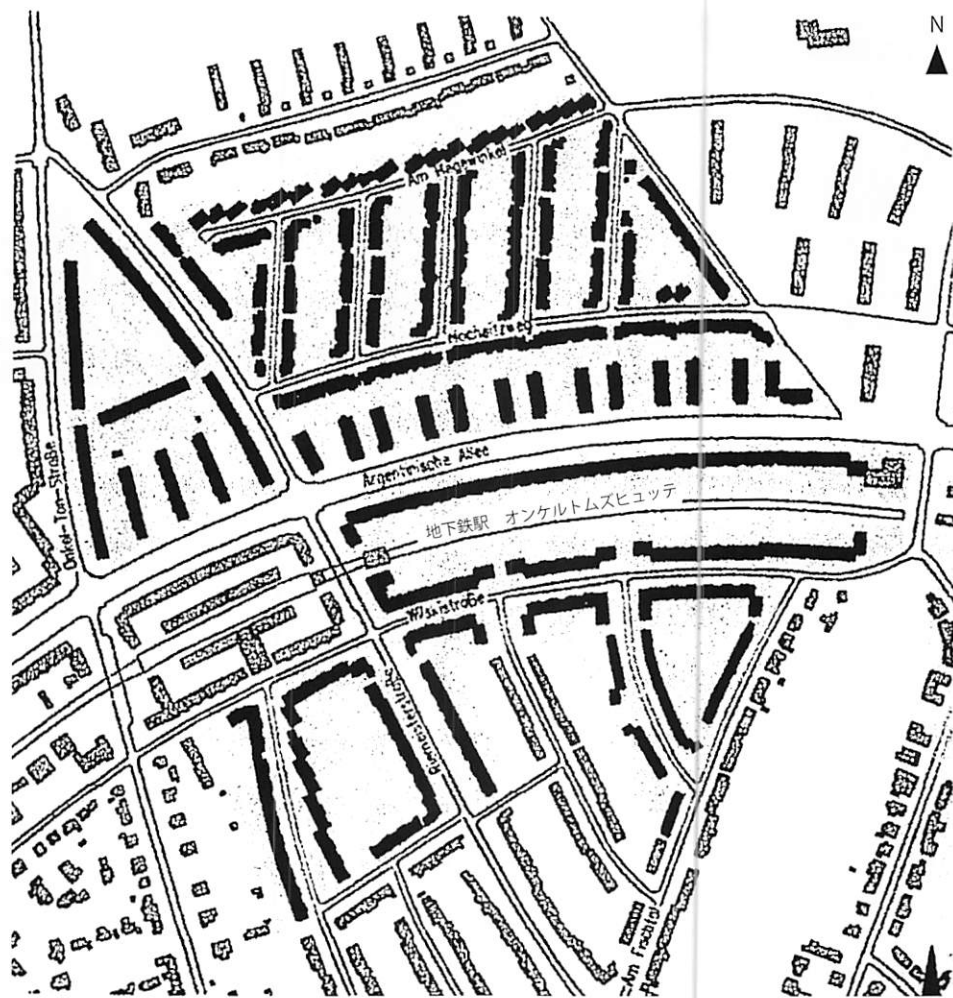


図1 オンケルトムズヒュッテのゾードルング敷地配置図

代の住宅団地建設の中でも特筆すべき都市計画が実現した。

筆者は1971年から73年の間、ベルリン工大ヘルマン・リーチェル研究所の客員研究員として、ベルリンの街に身を置いていた。時は海外旅行の自由化が進み、遠く日本から訪ねてくる人々がいた。その中には、早稲田大学建築学科の武基雄教授もいた。多くの訪問者は、筆者に全てお任せでベルリンの名所を案内してほしいと依頼してくれたが、武先生は自らの意志でこの建物を見たいと指定してきた。その指定されたのは、ブルーノ・タウトの手によるリーマイスター通りの集合住宅であった(写真6)。

その建物は、前面の道が曲がっているため、集合住宅もまた同じくその曲線に沿っている。黄土色に染まった



写真6 リーマイスター通りの曲線のある集合住宅

外観は、どこか温かみを感じさせるものであった。武先生は筆者が運転する車を降り、その住宅の前に立つと



写真7 アルゼンチン通りに沿う集合住宅



写真8 アルゼンチン通りの集合住宅のベランダ

「あー」と声を漏らし、まるで時間が止まったかのように動かなくなった。筆者は、武先生の様子から何か気分が悪くなったのではないかと不安を覚えた。

その夜、武先生はベルリンの拙宅を訪れ、様々な話を交わした。そして「君はいいな、ベルリンにはタウトの作品がたくさんある。自分は明日、ベルリンを去らなければならない」と言葉を漏らされた。その瞬間から、筆者のブルーノ・タウトに対する興味が芽生え、写真撮影や図面の収集が始まった。武先生は当時、筆者にとってあまりにも偉大な存在であり、リーマイスター通りの集合住宅に対する驚きの理由を尋ねることができなかった。

武先生は帰国後、病を得てしまい、その理由を伺う機会を失ってしまった。彼はタウトが日本に来た際、早稲田大学での講演を聞き、さらに東京大学でもその講演に参加されたと教えてくださった。そして、タウトに直接集合住宅の設計について質問されたこともお話しされた。おそらく、タウトは日本の学生に向けた講演で、リーマイスター通りの集合住宅を題材にしたのではないかと、筆者は勝手に想像を巡らせている。なぜなら、この集合住宅はタウトが亡命のような形で来日する直前の1931年に設計されているからである。

特徴的な外部空間や巧みにずらされた視線、奥行きのある住戸配置、交差点での広場のような拡張によって、活気ある街並みが形成されている。平坦な黄色の家の正面は、バルコニー付きの立体的な白と青のファサードと向かい合い、両側にはペントハウスが配されている。タウトは、曲がりくねった終端の住宅を巧みに配置し、リーマイスター通りの西側に広がる「キーフェルンホーフ」という広い中庭を作り出した。この中庭は光が差し込み、周囲の松の森に包まれた内部空間で、白と青のバルコ

ニー側に向かって広がる。自然のままの共同の緑地もあり、住民のフィシュタル祭りなどに活用されていた(写真7、写真8)。

ブルーノ・タウトに加えて、フーゴ・ヘーリングやオットー・ルドルフ・サルヴィスベルクも、それぞれの団地部分の設計を任された。タウトは北部の大部分を、サルヴィスベルクは南西部、ヘーリングは南東部を担当した。全体的な計画は存在せず、団地の配置図はタウトとマルティン・ワグナーの協力のもと、段階的に発展した。7つの建築段階に分かれた1,915戸の住宅(そのうち1,106戸は集合住宅、809戸は一戸建ての連続住宅)のうち、最初の4つの段階は地下鉄の南側に位置する。タウトが設計した集合住宅は、ヴァルトヒューテルプファード、イン・ゲステル、リエマイスターストラッセの間にあり、その東にはヴィルスギ通りに沿った集合住宅やアウアーハーンパルツ通りとアム・フィシュタル通りの一戸建ての連続住宅が含まれる。

集合住宅のエリアでは、わずかに2種類の住宅タイプと最も基本的なデザイン要素を使用し、1920年代の住宅団地建設の中でも並外れた都市計画的解決策が生まれた。特徴的な外部空間、巧みにずらされた視線、奥行き感のある住戸配置、交差点での広場のような拡張によって、活気ある街並みが形成されている。

地下鉄の線路の北側に、最後に完成した建築区画が存在する。この場所には、大きな都市計画の独自性が色濃く表れている。1929年から1930年にかけて整備された一戸建て住宅街は、アム・ヘーゲヴィンケル通りとホーホジツヴェーク通りの間に、北南方向に少しずれた五本の並行道路を持ち、非常に芸術的な魅力に満ちている。ここは、タウトがその技術を極め、「色彩建築の名匠」として名を馳せた区域でもある。台形のこの区画には、狭

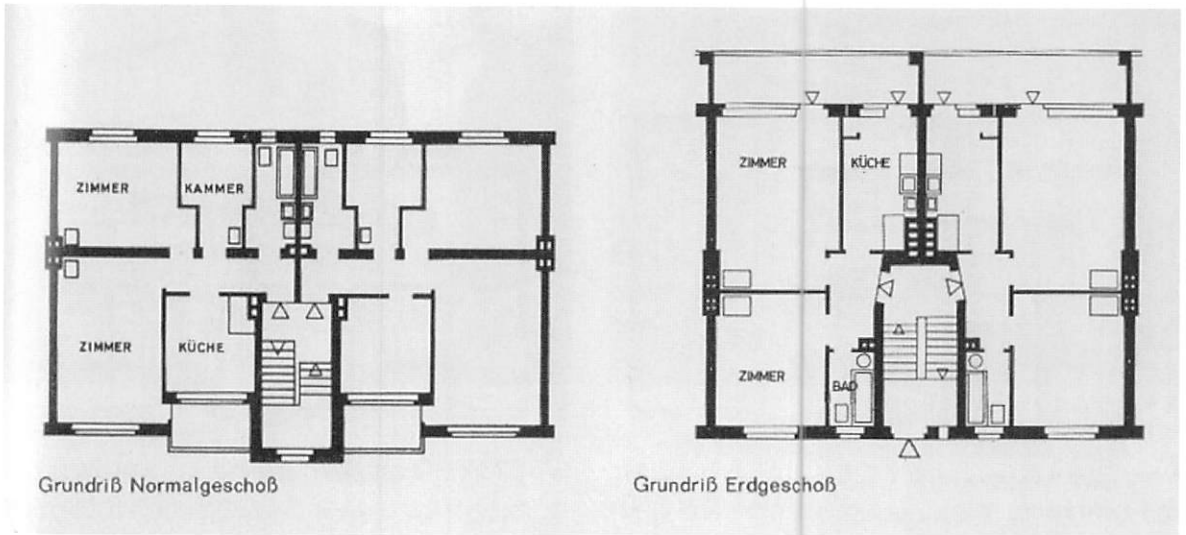


図2 オンケルトムズヒュッテのジードルングの住宅平面図



写真9 パバガイ地区の住宅の窓



写真10 パバガイ地区の住宅の窓

い住宅街に密集した一戸建て住宅が並び、タウトはそれぞれの住宅列を巧みに配置し、単調さを感じさせない精緻なシステムを構築した。

ここでは、小鳥たちが甘美な旋律を奏で、さえずりは心に残る余韻をもたらす。幅5メートルの連棟住宅が連なり、そこに息づく変化は、タウトの色彩使いによって一層引き立てられている。まるで夢の中の一コマのように、この住宅街は「パバガイ地区」と呼ばれ、パバガイ、すなわちオウムの名を冠する。窓を見つめていると、若き日の恋人が花束を抱え、駆け寄る姿が目に見え、窓が開く瞬間、少女の微笑みが放たれ、心の奥底にロマンチックな波紋が広がっていくのだ。この場所は、愛と青春の息吹が交錯する、まさに幻想的な世界なのだ(写真9、写真10)。

タウトは色彩を建築や都市計画の重要な要素と捉え、

「色彩の活動力と輝度」を駆使して、空間の広がり強調し、松林との調和を生み出した。窓や玄関扉、手すり

いった細部に至るまで色彩設計が施され、住宅の種類に応じた調和のとれた効果が実現された。太陽の位置を考慮し、住宅全体が一色にまとめられ、対になった家々が目立たぬよう工夫が凝らされている。

最後の建設段階では、312戸の住宅がわずか1年で実現された。主要な交通道路に囲まれた三角形の区画には、リエマイスター通りとオンケル・トム通りの間に3階建ての連棟形式の建物が建てられた。タウトは道路側のファサードにさまざまな深さの窓を設け、立体感を演出した。1970年代末からは、元のディテールや色彩の復元が進められ、個人所有の一戸建て住宅も一部保存を意識した修復が行われた。特に玄関や外壁の仕上げ、色彩、窓の変更が目立つが、オープンテラスを居住空間に取り入れる要望には、一貫したデザインコンセプトで応えたのである。

1930年から1931年にかけて建設された最後の二つの団地は、拡張されたアルゼンチン通りの両側に位置しており、その構造は都市的な特色を際立たせている。建築家タウトは、閉鎖的な遮蔽と開放的な列状構造をテーマに独自のコンセプトを打ち出した。彼は、アルゼンチン通りの南側に地下鉄の切り通しに沿って、450メートルの長さを持つ三階建ての建物を配置した。この建物群は、同じ形式の33棟からなり、タウト自身が「鞭の一閃」と表現したものでもあり、賃借人の庭のあり方に対する一つの解答でもあった。

彼は、1階部分の賃借人の庭に面するバルコニーを対になって配置し、道路側はフラットなデザインに統一した。建物は道路に沿って緩やかなカーブを描き、黄色い階段部分が突き出ること、波のようなリズムを生み出している。この巧妙な配置により、各住宅単位が部分的にししか見えず、単調さを感じさせない工夫がなされている。また、狭い壁のくぼみには、赤、青、白、緑の四色が施され、動的な要素を加えている。通りの反対側、北側には、狭い間隔で配置された入り口側と、広い緑地に面した建物裏側が対になった建物が並んでいる。

森の静けさを破るかのように、ジードルングの片隅には、タウトの顕彰碑がひっそりと佇んでいる。中央には、彼の言葉が刻まれている。「建築は調和の芸術である。」その言葉は、単なる理論を超え、彼の人生に深く根ざした信念を映し出している。彼が日本へと亡命のような形で辿り着いた経緯を、波乱に満ちた彼の略歴が静かに語りかける(写真11)。

世界には名だたる建築家が数多いが、タウトのよう



写真11 オンケルトムズヒュッテのジードルングに建つタウトの顕彰碑

に、住民の心に深い敬愛の念を抱かれ、こうして顕彰される者は果たして他にいるだろうか。彼の存在は、ただの建築に留まらず、文化の交差点としての役割を果たしているのだ。ブルーノ・タウト、その名は今もなお、静かな森の中で生き続けている。

おわりに

ブレンネ建築設計事務所において、オンケルトムズヒュッテのジードルングをユネスコの世界文化遺産に登録すべく、申請書類が鋭意作成されている。この事務所の長、ヴィンフリート・ブレンネ氏は、2007年にタウト設計によるシラーパーク、田園都市ファルケンベルク、住宅団地カール・レギエン、そしてブリッツの馬蹄形住宅という四つの名作を世界文化遺産として登録するため、懸命に申請書類を整えられた。そして、その努力は2008年に結実し、ベルリンのモダニズムとしての栄光を勝ち取った。しかし、今回は必ずしも平坦な道ではないかもしれないと、彼はその胸の内を漏らしておられた。彼の奮闘が評価され、再び世界文化遺産の名にふさわしい栄誉を受けることを、心より願うばかりである。

註

1. 田中辰明：ブルーノ・タウト設計によるオンケルトムズヒュッテの住宅団地、月刊建築仕上技術2009年3月号
2. Winfried Brenne "Meister des farbigen Bauens in Berlin Bruno Taut, Braun
3. Kurt Junghanns, Bruno Taut 1880-1938, E. A. Seemann
4. 田中辰明：ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家、中公新書2169（電子書籍もあり）
5. 田中辰明：ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会、東海大学出版会